

VI-7 入学時導入教育『スタディスキルズ』について

高知工科大学社会システム工学科 教育講師 正会員 永井博之 フェロー会員○伊藤綱男

1. はじめに 高知工科大学では、平成 15 年度から新入生を対象とした講義『スタディスキルズ』（以下 S S と称す）を開始した。本稿は、S S の実践結果についての報告である。本学は、来るべき社会に活躍できる技術者の育成を教育目標にしており、1997 年の開学当初より入学時点での教育が重要との認識のもと、1 年生から少人数でのセミナーなどの科目を設置し、個々の学生の長所を伸ばす教育を実施している。一方就職活動においては積極性や意欲、コミュニケーション力などの人間力・社会対応力が要請されている。これまでの分析から就職活動において不活発な学生は入学当初から不活発であるとの結果があり、何らかの対策が必要とされていた。S S の講義は、これらを受けて、学生がポジティブに活動することに重点を置き、テーマに主体的に取り組み、課題解決を図る、その中で大学に必要な学習の基礎学力（読む、書く、話す、聴く、議論する、考える力）を育成するという方針のもとに、また社会に出るための心構え、すなわち就職に至るまでの人間力を高める教育の第一歩として位置づけ、開講された。

2. SSの講義概要

1)実施概要 1 年生 5 学科 559 名を対象とし、1 班平均 16 人、36 班で実施した。週 1 回 90 分を 15 回としている。本学では 1 年を 4 クォーター（以下 Q と称す）に分けているが、S S は 1, 2 Q で実施した。担当教員はクォーター毎に交代、学生は 1, 2 Q でそれぞれの課題に取り組むことになる。

2)講義方法 講義は教員が一方的に教えるのではなく、学生自身が積極的に活動して、教員のアドバイスを受けながら、課題に取り組んでいく方法とした。

3)教育講師制度 S S を実施するため、専門教育の教員とは違った専任の教員に担当させるものとして教育講師制度が発足した。55 歳を中心とする人材の公募を行い、平成 15 年 4 月に 9 名が採用された。大学研究者は 2 名であるが、ほかの 7 名は企業等における実務経験者である。社会システム工学科の二人（永井、伊藤）はそれぞれ橋梁メーカー、建設コンサルタント出身であり、建設部門技術士資格を有している。

4)講義内容とテーマ 講義内容は、教育講師の実務経験を活かしそれぞれ得意分野の課題を設定し取り組んだ。テーマは、原子力発電とは何か、ノーベル賞、人とロボット、ものづくり、製品の機能と品質、対立する命題を考える、会社の仕組みを理解する、高知県の産業の問題点と解決策、学科を意識し熱中できるターゲットを探し調べて提案しようなどであった。

5)講義方法と学生の実践事例 筆者の一人伊藤が担当したテーマは、「土佐山田町の特性を分析する。サブテーマ：歴史、産業、まちづくり、環境」であり、以下にその方法と事例を紹介する。学生は自分の好きなテーマを選択しテーマ別にチーム編成し、検討することとした。テーマ選択の理由、ねらいや調査計画を検討させた上で、現地調査を実施させた。現地での問題点把握、問題解決のための改善案検討を求めた。またレポートの書き方等の基礎スキルを指導したが、基本は自分で現地に行き調べ、自分で考え、チームで検討しまとめ、発表することである。個々の意見をカードに記入し、チームとしての考え方を集約する手法を使い、模造紙により毎回まとめの結果を発表した。発表は毎回交替とした。最終発表では学生間での相互評価も実施した。2Q では、配布されたパソコンを活用し、宿題等はメール添付による提出とした。

実践事例1：「土佐山田町の商店街の活性化について」をテーマにした学生は、商店街に行き、実際に店主や来客者、通行人にアンケートを実施し実態を把握すると共に、インターネット情報から全国での商店街活性化の活動事例を参考とし、具体的な活性化対策の提案として発表した。

実践事例2：まちづくりをテーマとした別のチームは、現地調査で発見した商店街に存在する歴史的あるいは特徴のある建築物に注目し、これらを活用した街づくりや駅前開発の考え方の提案を行った。

実践事例3：産業をテーマとした学生は、土佐山田町の特産品である打刃物について調査を行った。刃物工

場へ行き、製作過程をデジカメで撮影し、工場主から聞き出したものづくりのポイントや製作過程のほとんどを写真と解説をつけレポートした。また販売戦略についても若者感覚での提案があった。

なお、最終回では、学科毎に発表会を行った。代表チームがパワーポイントにより発表した。発表会には学科教員も参加し好評であった。レポートは、班ごとに冊子として各自に配布した。

3. 実施結果

1)受講状況 全学科学生の受講状況は、欠席率が 1Qでは 6.1%、2Qでは 12.5%であり、2Qの出席率が悪い状況であった。不活発学生へ個別指導したが、結果として、1割近くがリタイアとなった。

2)学生による授業評価 本学には、学生が授業を評価する制度がある。SSについての結果を表―1に示す。SSの平均値は、全科目の平均値よりも若干高く、実験科目やセミナーの科目とほぼ同様な値を示した。2Qでやや低くなっているが、受講に“だれ”があるかもしれない。

3)学生の自己評価 SSの実施前と後について学生による自己評価(5段階評価)の結果(2Qでの総平均)を示すと図―1の通りである。調べる、書く、話す力は比較的效果があったと伺える。

4)学生からの意見 学生からのアンケートにより、SSの感想意見を求めたところ、「物事を調べたり発表能力がついた」「テーマ設定は適切でよかった」「パワーポイントが使えて楽しかった」「毎週宿題があり、負担が大きかった」などが多くを占めた。

5)学科教員の評価・意見 学科教員からは、「口頭及び文章での表現力で十分成果を挙げた」「少し熱心にセミナーを受講するようになったように見える」「時間と経験の積み重ねが必要であるが、今までやってきた方法を大切にしながらも、改良を少しずつ加えていくアプローチで良いのではないか」とあり、SSの効果は目に見える形で現れているという評価、またSSの目的とするスキルや能力は長い時間をかけて徐々に現れてくるものではないかという両面からの意見があった。

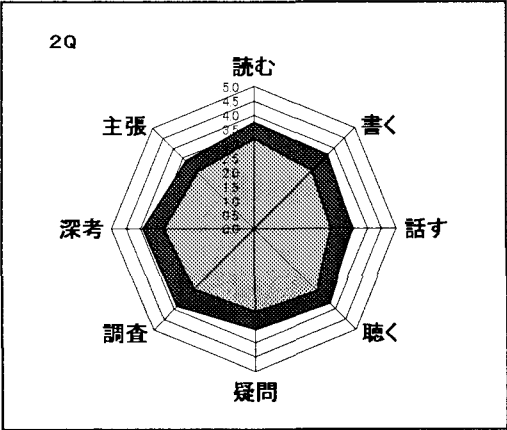
4. 今後の課題等 以上の実施結果及び評価から、SSの効果は概ねあったといえるのではないかと考える。しかし、受講した学生が就職活動する時点で、その効果がどの程度どう現れてくるか大変関心のあるところである。今後も何らかの形でフォローアップしていく必要がある。今後の課題は次のようである。

①1Q、2Qとでは、授業評価及び出席率に差異が見られたが、その原因と対策が必要 ②不活発学生やリタイアした学生へのフォロー ③人間力や学力に関する学生カルテ作成及び個別指導のあり方 ④学習能力段階に応じた指導方法の工夫 ⑤長所を伸ばす教育に向けて、より意欲を湧き出させるような指導方法の研究 ⑥他の科目との連携した効果的な進め方など課題は多くある。

本学は、日本一の面倒見のいい大学を目指しており、SSはまさにその実現への第一歩である。15年度の実績を踏まえさらに、工学教育の基礎科目として、充実し進化するSSを目指し、教育講師の使命を果たしていくこととしたい。本稿を作成するにあたっては、坂本明雄教授(工学部長)、河田耕一教授(就職センター長)、村上雅博教授(社会システム工学科)及び全ての教育講師の方々に多くのご支援を頂きました。厚く感謝申し上げます。

表―1 学生による授業評価 (4点満点)

	1Q	2Q
全科目平均	2. 81	2. 81
スタディスキルズ	3. 06	2. 93
セミナー・実験系講義	3. 19	3. 04



図―1 学生の自己評価